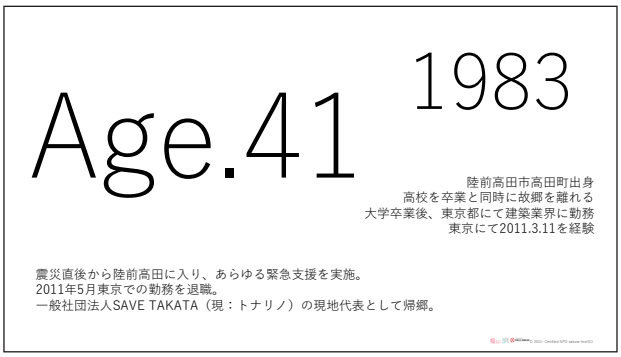
(3) 東日本大震災の記憶の継承について

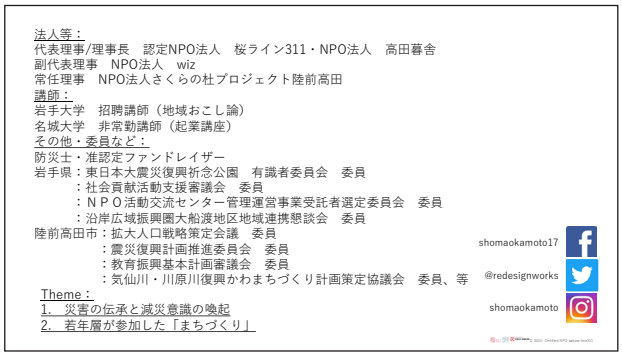
認定特定非営利活動法人桜ライン311代表理事　岡　本　翔　馬

皆さん、改めましてよろしくお願いいたします。今、御発表された菅原さんのちょっと北にある陸前高田市というところから本日参りました。桜ライン311の代表理事をあずかっております岡本と申します。本日はよろしくお願いいたします。

取りあえず僕は今、めっちゃ緊張しています。というのも、まず１つはすごくアウェー感があるなと思っていて、私自身いろいろなところでお話しさせていただくのですが、どちらかというとこういった土木系の皆様の前でお話しさせていただく機会というのは実はあまりなくて、そういう意味では、いつもとはちょっと違う会場の雰囲気で、どんな感じになるのかなと楽しみなところもございますが、お話をさせていただきます。

私自身の自己紹介も含めてうちの団体、そして、今日のテーマである自然災害の記憶の継承についてということでお話をさせていただきます。簡単に自己紹介をさせていただきますと、私自身は陸前高田市の高田町の出身ではありますが、震災のときは東





京の比較的この近く、麹町で建築の仕事をしていました。家族の安否を取るために一回地元のほうに会社の休みを取って戻ったのがきっかけで、避難所の運営であったり、いわゆる支援活動というものに従事するようになりました。東京の仕事を退職して、その後、陸前高田に戻って、今日お話しさせていただく桜ライン311以下、幾つかのＮＰＯ法人であったり、大学の非常勤だったりとか、いろいろなことをやらせていただいているという感じでございます。なので、多分、皆様とも大分その辺では違うところもあるのだろうなと思いますが、よろしくお付き合

いいただければと思っています。

１本だけ動画があるので御覧いただきます。音は風の音しか入っていないので映像を見ていただくだけで大丈夫なのですが、これが私の実家があったところです。私自身は2011年３月11日を東京で過ごし、家族の安否を取るために、こちらに出てきている同郷の友達３人と、ちょうど車を持っていたので、東北道や新幹線は完全に止まっていましたから４号線を上っていったら何とか帰れるのではないかという仮説を立てて、４号線をひたすら北上して地元の陸前高田に入りました。到着したときは夜で、夜の時間は消防さんや自衛隊さん、警察さんに被災地域に入らないように言われていましたので、翌日の朝に自分の家がどうなったかは見に行きたいよねということで見に行ったときの景色がこちらになります。ここにコンクリートの基礎がありますが、ここの上に僕の実家が建っていたという感じになっています。

今を「生き切る」。

今を「生き切る」と書かせていただいたのですが、私自身も一言で言えば、被災した立場でものを見たときに、とはいえ、その当時、僕は東京に生活圏があったので、ぶっちゃけ自分はあまり被災している感覚がないのです。避難所の運営をお手伝いしているときに、同級生であったり、後輩であったり、結構町のために頑張っているやつが死んでいったというのを自分の中で認識し始めました。そのときに、率直に「死ぬ順番、違うじゃねえか」と思って、何で

明日終わるかもしれない人生。
その瞬間の積み重ねをどう生きる？

次の世代が目指したいと思える背中

共に同じところを目指す仲間
応援してくれる多くの人たち

東日本大震災で生まれた芽を育てる
新しい意味

目の前の人を助けたい
×
生き残ったことへの罪悪感

NPOの可能性×自分の可能性

もらった縁を、恩をどう返していけるか？
その人たちの期待に応えるということ。

地方都市特有の課題
2040年問題

この時代に生まれた意味

好き勝手に生きている自分が生き残って、地元のために頑張ってるやつが生き残らなかったんだと強く思いました。そのこと自身はもう変えられることではないので、彼らのために自分自身に何ができるのだろうかということを考えたときに、まず１つは、震災の今回の教訓をちゃんと伝承していって、もう誰も亡くならなくていい社会をつくりたいと思ったことと、あとはまちづくりの観点から、もっとたくさんの人がコミットメントできるような形をつくる必要があるのではないかと考えて、今、いろいろなことをやらせていただいております。

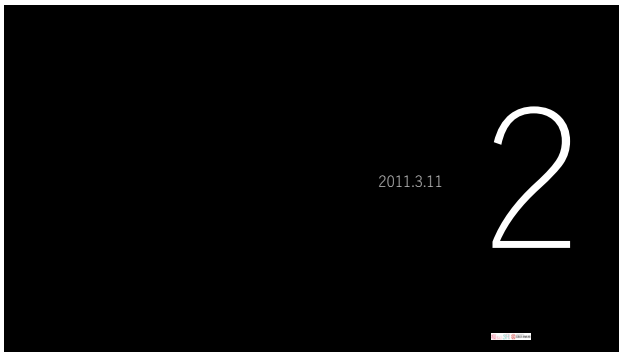
NPO経営者として
目指すもの

1. 長期的に事業継続可能なレベルのNPO
2. 職業として「ちゃんと」成り立つNPO
3. 対日本・対世界で価値を生み出せるNPO

そういった形で、2011年５月頃に東京の仕事を退職して岩手に戻ったわけですが、そこから14年間、桜ライン311として事業をさせていただいておりますので、そこにいろいろな思いが積み重なって今になっています。左側に寄せてありますが、桜ライン311というのは純粋な民間の取組です。スタートしたときは、10人ぐらいの市民を中心としたメンバーでした。その後、事業を広げていくごとに、文字どおり日本全国の個人の方、企業の方と御一緒いただけるようになり、日本全国の皆さんと推進する事業に育ってきています。なので、僕らはそういう意味では日本全国の皆さんから頂いているものがありますので、それをいかに成果として落としていくか、防災・減災というテーマで役立てていくかということは、すごく大きなテーマだと思います。あと、右側に寄せてありますが、皆さん御存じのとおり今回の

東日本大震災というのは、その当時は未曾有、想定外というような表現もされましたが、今はＬ２に当たる地震・津波ということで、周期的に発生することが広く知られるようになった災害です。その時代に僕らはちょうど生きているわけですが、では、そのことを、大変な時代に生まれてしまったなと、運が悪かったなと思って終わりにしてしまうのと、あれはすごく大変な時期だったけれども、あれがあったから今の僕たちがいるよねと思えるというのは全く別のものだと思っていますので、私の場合は常に後者で、ＮＰＯという分野においてそういったものがつくれたらなと思っている人間でございます。

あともう一つ、代表理事というのは、平たく言うとＮＰＯの経営者ということになりますが、今、私自身としては３つの目指すものがあります。まず１つは、民間ならではの考え方かもしれませんが、中長期的に事業継続可能なレベルのＮＰＯを１つつくるということです。皆さんも御存じかもしれませんが、今回の東日本大震災ですごくたくさんのＮＰＯが生まれました。東北の岩手、宮城、福島だけでも1500は超えているとされています。でも、じゃあ今その1500の団体で継続できている団体は何％あるのですかというと、実は極めて少なくなってしまいます。そういう意味では、私どもの事業は桜を使った記憶の伝承ということになりますが、必要な時間の事業軸が30年とか50年とか、何だったら100年というスパンで考えています。なので、その期間を耐え得るようなＮＰＯをどうつくるかということがまず１つ。さらに言うと、そこに携わって、仕事としてスタッフとして従事する人たちが、ちゃんと生活が成り立つだけの給与であったり、社会的な立場とかそういったものを含めてちゃんと成り立つようなＮＰＯにしたいと思っています。なので、この１と２を成り立たせるために、東日本大震災で生まれたことは事実ですし、それは変えられないことではありますが、この東日本大震災ということだけでお金を集めていくのではなくて、まさに今日のテーマではありますけれども、日本というのは自然災害がこれから多発していく時期になっています。そういうときに、これからの未災地に、ある種、偉そうに話したいわけではないですが、先輩として命を守るすべをお伝えしていく、防災・減災というところで成立する団体ができるのであれば、それは達成できるのかなと思っております。



お話を進めていきますが、東日本大震災当時の被害について、ざっと御説明させていただきます。陸前高田市は、先ほど事例発表で挙げられた気仙沼市さんの北のお隣の、岩手県では最も南側の沿岸にある自治体になっています。人口は震災前で２万4246人、死者・行方不明者が1800名後半となっているので、人口対比としては約7.4％から、集計の仕方によっては８％ぐらいまで上がります。世帯数が約8000ありまして、全損の世帯数は50％を超えるということで、岩手県の中では最も被害の大きかった自治体ということになっています。

なぜこれだけの被害が出たのかというのは、これが震災前の陸前高田市の写真ですが、三陸の沿岸の自治体の中では珍しく平地が多いというのが、実は当所の特徴になっておりまして、街というのは原則的に平らなところに広がっていくものですから、この写真でいうと中央の左側に市庁舎を含めて街の中心機能というのがかなり集積していました。ここだ

けでは収まらない機能が高台であったり、その周辺ににじみ出るように広がっていった街になっています。

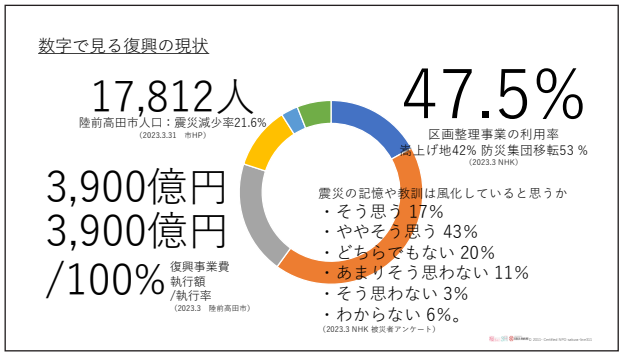
2011年5月（東日本大震災から2ヶ月）

ここに実際、東日本大震災の津波が直撃したということで、震災直後の写真としてはこういった形になっております。写真の左上方向に海がありまして、そこから右下の方向に津波が入っていったという形になっています。

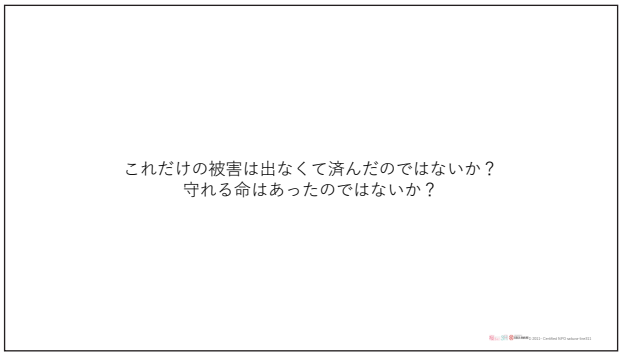
2022年3月11日（東日本大震災から11年:提供岩手県）

今現在の姿としてはこのような形になっておりまして、当所の大きな復興計画の軸としては２つございます。まず１つが、もともとチリ津波のときの対応をするため5.5メートルだった防潮堤を12.5メートルまでかさ上げするということ。もう一つ、住宅を建てるような場所に関しては全体を10.5メートルかさ上げしましょうと。その上に街をつくりましょうという形態を取っております。当所の場合は、津波は大体18メートルがマックスという記録が残っているのですが、そうすると、12.5メートルの防潮堤だと約5.5メートル分足りないということにはなりますが、この写真で点線を引いているところと防潮堤の間の部分が大きな貯水池のような働きをして、超える5.5メートル部分に関してはここで受け切れて、高台で上げた10.5メートルのところには被害が出ないというシミュレーションに基づくものでまちづくりがされております。

現状のところで少し補足させていただくと、当所も震災に関わるような減少率というものがございまして、21％ほど減少しており、今、大体１万7800人



前後の人口となっております。復興予算も、陸前高田市は岩手県の中では最もつけていただいた自治体ですが、こちらについても全て執行済みということで、いわゆる復興工事というものは完了しております。ただ、一方で、どこの自治体さんもここは一緒なのですが、かさ上げ地や防災集団移転地においては、まだ残念ながらかなり更地が目立ちます。インフラは整いましたが、建てる方が少なくなってしまったという大きな課題が今はあるかなと思っています。私自身は防災・減災、記憶の伝承ということがテーマなので、そこで少しだけアンケートの中身を御案内させていただきますが、毎年ＮＨＫさんが「震災の記憶や教訓は風化していると思うか」というアンケートを住民の方向けに取られます。これは岩手県の数字ですが、岩手県の方でも「そう思う」「ややそう思う」という方が全体の６割を占めるということが、ここのテーマにおける一つの今の実情なのかなと思っています。



桜ライン311のお話をさせていただきますが、「私たちは、悔しいんです。」という言葉で集まった、当時、市民を中心とした10名のメンバーで事業がスタートしました。何が悔しいのかということなのですが、本当にこれだけの人が亡くならなければいけなかったのですか、そうじゃないよねということが僕らの思いです。

今日来ていただいている方はその手の専門家の方なので、僕なんかがこうやってお話しするのは恥ずかしい限りなのですが、三陸沿岸というのはしょっちゅう地震と津波の被害を繰り返してきています。これは岩手県の死者数だけを引き抜いたものです。冒頭の能登半島のところでもありましたけれども、日本はどこにいても地震と津波を繰り返しているわけです。だから、沿岸の地域は原則的に、地震と津波に対してめちゃくちゃ意識が高い住民の方が多いなという印象があります。でも、一方で、今回のような東日本大震災、今まで経験したことのない未曾有、想定外とよく呼ばれるようなものが発生しました。報道として流れたのは2011年の８月ぐらいなのですが、未曾有、想定外と言われていた東日本大震災ですが、実はそうではありませんでしたということが広く知られるようになります。実際、その調査は震災よりももっと前に行われていたものなのですが、注目されたのが震災以降という皮肉がございます。その報道を見たときに、もし仮にこの街に20メートル近い津波が来たことがあるということを住民の人たちが認識していたら、そこに助かった命はあるのではないですかというふうに私たちは思いました。過去の東日本大震災の１個前の津波は896年の貞観地震とされていまして、歴史書というか古文書に少し明記があるだけのものだと。だから、それは伝わらなかったのです。なので、次の東日本大震災というのが、確率の問題ではありますが、必ず来るとしたときに、では、どうやってその時代の人たちに伝え残せるだろうかということを考えていきました。

先人たち、明治三陸、昭和三陸を御経験された人たちは、低いところに家を建てるなとか、大地震があったら高所に集まれというような教訓を石碑に残しています。これは共に陸前高田市にあるもので、三陸全体で300本以上が現存していますし、陸前高田市にも15本あることが分かっています。前の時代の人たちは、一生懸命こうやって次の時代に伝えようとしたわけですが、では、次の時代を生きている僕たちはそのことを知っていたのか。残念ながら、僕は全くこれを知らなかったのです。ある日、桜ラインをやっていて、前の時代の人たちが石碑を残しているみたいだから見に行こうぜと見に行ったら、この右側の細いタイプが僕のおばあちゃんの家の駐車場の入り口に建っているのです。そこで初めて、僕はこの石碑は津波で建てたものなのだということを知りました。石碑というのは文字を彫れますし、管理もしなくていい。150年から200年ぐらいで入れ替えはしなければいけませんが、いい面もたくさんあります。でも、一方で、多くの人たちの記憶に残るものかというと、それもまたちょっと違う特性なのだと思います。実際、日本というのは石碑を建てる民族性がありまして、何かと石碑を建てたがります。至るところ石碑だらけです。でも、その石碑が何で建てられたかということが広く知られていることは、実はあまりケースとしてはありません。なので、石碑は石碑でよいとして、もっと違う特性でこの東日本大震災の教訓を伝えていくことはできないだろうかと私たちは考えて、じゃあそれ、桜でやろうぜと考えております。

これは、陸前高田市の浸水域地図と呼ばれるものになっています。スライドだと色が飛び気味ですが、中央付近のピンクで塗り潰されたところが今回津波の浸水を受けたところになっておりまして、四角で塗り潰されたところがその地点における津波の

桜 × 最大到達地点
次の「いのち」を守るために。

高さ、T.P.ベースになっていたと思いますが、国土地理院さんのものになっています。ここは地形によって、波をかぶったところとかぶっていないところの境界線ができていきます。そこを僕らは津波の最大到達地点という呼び方をしておりまして、これが陸前高田市内だけで直線にすると約170キロあります。なので、170キロに１本ずつこういった形で、１万7000本の桜並木をつくっていきます。もし同じような地震があって津波が来るおそれのあるときは、この桜並木よりも高い、上のところに避難してもらうことで、人的被害をかなり軽減できるのではないだろうかという仮説を立てました。実際、今の中心市街地も浸水域の上にありますが、平らなところに街ができていく。そこは利便性がいいし活用性も高いので、そういったところが利活用されていくことは回避できないものですが、家は建て直せばいいですし、車は買い直せばいいけれども、人命だけは帰ってきませんので、人命だけはせめて救いましょうということで、こういった形で進めさせていただいております。

桜を植える理由
2017年4月撮影

何で桜にしたのかということですが、この当時の理由としては、石碑ではないものでということが１つ。あとは、人より寿命が長いものでということが１つ。あともう一つは、多くの人たちが覚えていたい、プラスの感情を持っているものでということでした。なので、早いタイミングで木がいいよねという話になっていったのですが、木と一口に言ってもいろいろな品種がございます。その中で、日本人にとって最も特別で愛されている木って何ですかということを考えると、桜以外ないだろうということになりました。

桜について：

桜：
バラ科モモ亜科スモモ属（Prunus, Cerasus）
（バラ科サクラ亜科サクラ属）
国内約600種
自家不和合成のため変種が生まれやすい

野生種：100種程
原種と自生種に大別

里桜：500種程
いわゆる園芸種。野生種を人為的に交配/変性した品種
ex:ソメイヨシノ
全国の植樹されている80%は当品種。短寿命が短い、最長寿のものでも130年程。
日本に存在するソメイヨシノは全てDNAが同一のクローンであることが2012年判明。

原種：9種
オオヤマザクラ
オオシマザクラ
エドヒガン
マメザクラほか

自生種：
原種間の自然交配、変性で発生。

実際、桜を植えると決まったわけですが、一口に桜と言っても、日本全体で600種類ぐらいの品種がございます。大別すると、自然発生した野生種と呼ばれるグループと、人が品種改良して花がきれいに咲いたり、変わった形をしていたり、色が違うとか、そういったいわゆる園芸種と呼ばれるものに大きく分かれております。私どもの場合は、次の震災の世代に伝えていくということを考えたときに、一番大事なポイントは寿命が長いこと。そして、病気や虫とかで枯れにくいということでしたので、いわゆる里桜というのはデリケートな品種が増えていってしまうので、左側にある野生種の中から品種選定をしましょうということで選ばせていただいております。

桜ライン311でメイン使用する品種

4品種を基本として、地権者からの要望と植樹地の環境要因を重ねに決定します。

オオヤマザクラ（原種）
花色が淡紅色のためベニヤマザクラ（紅山桜）、北海道に多く生育することからエゾヤマザクラ（蝦夷山桜）とも。樹高は最大15m程度。花の色味は強めで葉は紅葉する。耐寒性もあり傾斜地にも向くため扱いやすい。現在の主軸種。

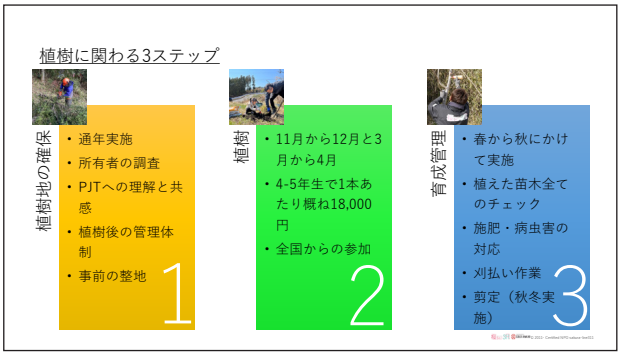
エドヒガンザクラ（原種）
葉が展開するより先に大量の小輪の花が咲くため見栄えが華やか。ソメイヨシノの片親としても有名。樹高は最大30m程度。花の色味は淡紅色でまれに白色で、葉は紅葉する。長寿かつ巨樹になるものがあるのも特徴。

ベニシダレザクラ（自生種）
エドヒガン（原種）の変種で、枝が下垂するもの。その中でも花色が特に濃いものを指す。樹高は最大で25m程度。花色味が濃く葉は紅葉する。生育が旺盛。地権者さんに大人気の品種だが、枝が柔らかく上に伸ばすのが大変。値段が高い。

シキザクラ（里桜）
マメザクラ（原種）×エドヒガン（原種）の種間雑種とされる。春と秋の年二回小輪の花が咲かせる。樹高は最大でも5から7m程度。上部に制約がある場所で扱いやすい。豊田市立小原中学校から特別提供。

今、主に植えているものになりますが、オオヤマザクラ、エドヒガンザクラ、ベニシダレザクラという３品種を基本ベースとしまして、それぞれに大体

15メートルからマックス30メートルぐらいまで大きくなる大型の品種になっています。寿命は、もちろん植える場所の各種条件にもよるのですが、平均すると大体300年から500年ぐらい、長いものになると1000年を超えて天然記念物になるような個体も出る品種を選ばせていただいています。この３つを基本ベースとしまして、一方で、上に電線が走っているとか、超大型になると困るような現場もたくさんありますので、そういった場所に関してはシキザクラであったり、カワヅザクラであったり、矮性といいますが、あまり背丈が大きくならない、５メートルぐらいで成長が止まるような品種を使わせていただくことにしております。幾つか品種を分けているということには、実は大きく、明確に２つの理由がございます。１つは、全滅のリスクを避けたかったということです。１万7000本の桜並木を単一の品種でつくってしまうと、どこかで病虫害が発生したときに、同一の品種なので、すぐ隣の木に伝染病がうつるように病気・虫がうつっていって全滅のリスクが出てきます。なので、品種を幾つかに分けることで、この品種はこの病気が出やすいけれどもこの病気が出にくいとかいう特性があるので、全滅のリスクを下げられるだろうということで分けていることが１つ。もう一つは、土地の所有者さんから許可を頂いて植えることになっていますので、所有者さんに品種を選んでもらって、そこに愛着を持ってもらおうということで分けさせていただいています。



今お話をしてきたように、私どもは桜の木を用いて震災の記憶を伝承していこうという団体なのですが、実際のところ植えるのは一部でございまして、大きく分けて３つのステップを通年かけて事業展開させていただいています。まず１つが、植樹地の確保ということで、１年間通して所有者さんを見つけ、何でこういったことをやっているのか御理解いただいて、植える許可を頂いて植えられるように土地を整える、整地という作業が入ります。植樹に関しては、この後も別のスライドがありますが、11月から12月、３月いっぱいのところ、年間２か月ほどで約３メートルの苗木を、全国から御参加いただいて植える形になっています。もう一つ、育成管理ですが、植えた後の桜はほっておけば満開になり、きれいな花に育っていくわけではありません。なので、病虫害が出ればその対策であったり、肥料が必要なときは肥料をあげる、剪定に関しては秋冬に実施するということで、年間通して桜の管理をさせていただいております。

今お話をしてきたように、桜の木を植える団体なのですが、実は植えるのは僕ではなく、この左側の写真にあるような次世代の子供たちと、日本全国のボランティアさんの、大きく２つに分けているのが特徴です。今まで植えてきた本数としては、今ちょうど植樹のシーズンなので本当はちょっと増えているのですが、箇所数としては多分440か所、本数としては、今日時点だと2290本ぐらいになっているはずです。

何で地域の子供たちに参加してもらうかというのは、これはもう純粋に、次世代に被災経験のない子たちがどんどん増えていくからです。陸前高田市でももう13年半たっておりますので、小学校６年生はおろか、中学校１年生以下は震災以降の生まれということになります。なので、被災地ですらそういった形で震災を知らない子供たちがどんどん増えていくので、その子たちにまず、震災のことをちゃんと考えて感じてもらう日にしようということで、防災・減災の講演や植樹会を設定させていただいています。あともう一つ、右上にある日本全国のボランティアさんにお集まりいただくということなのですが、これは端的に言って、能登半島もありましたけれども、南海トラフ地震等、結局、日本というのは、どこにいても自然災害の被害に遭うリスクを避けら

れない国土です。これはもうどうしようもないことです。その分、豊かなところもあります。ただ一方で津波というのは、震源域との距離にももちろんよりますが、大体の場合、地震が揺れて収まって街を襲うまでの間に時間が発生するのが特徴ですよね。だから、その瞬間にちゃんと高いところに避難するということを冷静にしてくれれば、人的被害は限りなくゼロに近づけられる災害だと思っています。そのことを日本全国の皆さんに感じてもらうために、現地でないと見えないもの、感じられないものがたくさんあるわけですから、来ていただいて津波の到達地点上に立ってもらいましょうという趣旨で、日本全国のボランティアさんにお越しいただくという手法を取っています。今までにトータルで9000人ぐらいの方に御参加いただいておりますが、主な方はどこから来ているかというと、実は関東圏が一番割合としては高く、第２位が名古屋周辺、第３位が大阪周辺ということで、遠くから来ていただく方がうちの団体の場合は特徴的に多いです。

今お話ししてきたとおり、防災・減災を伝えていくことを目的とした桜の植樹ですが、今は明確に意図を４つに分けてやっております。まず１つは、先ほどのスライドでも少しお話ししたのですが、現地でないと感じられないもの、見えないものというのがすごくたくさんあります。なので、まず、来るきっかけにしてほしいということが１つ。そして、今お話ししてきた防災・減災のための桜並木をつくるということが１つ。あともう一つは交流面で、日本全国のボランティアさん、企業さん、個人さんと地域の人をつなぐ、人をつなぐ交流の装置として捉えているところがあります。

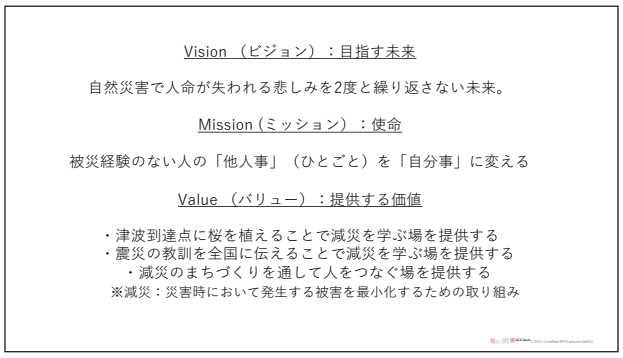
僕がすごく大事にしているエピソードがあるのでちょっと御説明させていただきますが、ある日、うちの桜ラインの事務局に、とあるおばあちゃんから電話がかかってきました。どんなお電話かというと、前に植えてもらった桜の木なんだけれども、このたび造成して自宅を再建することになったと。そのままだと桜の木を切らなければいけなくなってしまうので、預かってもらうことはできるだろうかと。造成が終わって家を建て終わったら、同じ場所にその桜を戻してほしいというお電話でした。なるほど、自宅の再建おめでとうございます。じゃあそれ、僕らが取りに行きましょうということで、おばあちゃんの家に行って、そのときにおばあちゃんがこうおっしゃるのです。そのおばあちゃんの家は10本の桜が植えられているのですが、この10本の順番を変えないように戻してほしいと。順番を変えるな。なるほどと。ナンバリングして引き抜いて、また戻すときにナンバリングして戻せばいいだけなので、順番は維持できそうですと。でも、その順番にどんな意味がおありになるのですかということで、そのおばあちゃんにお話をしたら、この桜の木は、日本全国のボランティアさんが植えたものだと。そのボランティアさんたちが、自分が植えた桜の木が今どうしているのか、どうなっているのか、時々見に来てくださっているそうなのです。その人たちは常にこのおばあちゃんの土地を見ているわけではありませんので、植えたときに、うちらは左から２番目だったよねとか、一番右側だったよねというふうな位置で覚えている。左から何番目、右から何番目で覚えている人たちがすごくたくさんいると。桜も２～３年成長すれば木の形が全然変わってしまいますから、そういう意味では順番で覚えている人はすごく多いのです。その人たちが、自分が植えた桜が順番が変わるとぐちゃぐちゃになってしまって分からなくなるから、それはきっと寂しがるだろうと。だから、私にとっては順番がすごく大事なことなのだというお話でした。なるほど、この桜はすごく愛されているなと、ありがたいなと思いました。そのボランティアさんたちは、僕は御連絡先が分かっているのでお電話して、見に来てくださっているそうでありがとうございますと。今度、行ってもないかもしれないけれども、それは心配しないで、僕らが預かっているだけだからという御案内でお電話させていただくわけですが、そうしたらそのとき、ボランティアさんはおばあちゃんのことをママとお呼びしているわけです。もちろん本当のママではない、あだ名です。でも、そのママという表現を聞いたときに、僕

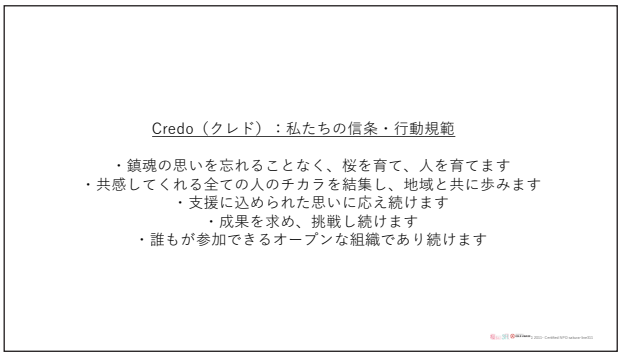
はすごく気持ちが温かくなりました。何でかというと、そのおばあちゃんは震災の前に息子さんを亡くしていて、震災直後に旦那さんも亡くして、この街で今、一人で住んでいるおばあちゃんなのです。だから、もうママと呼んでくれる人はいない人なのです。そうなったときに、たとえ震災以降のつながりだとはいえ、ボランティアさんにママと呼んでもらえるというのは、そのおばあちゃんからしてみたらすごくうれしいことだろうなと思ってうれしく思いました。別の機会があってまたおばあちゃんとお話しする機会があったときに、こう言っていただいたんです。私は正直なところ、生き残ってよかったと思う瞬間はほとんどないと。でも、明日も生きなければいけないなと、震災をきっかけに思うようにもなったと。それは、日本全国の人が私のことを気にかけてくれるからだ、会いに来てくれるからだと言うのです。その人たちが会うたびにママ元気？と声をかけてきてくれると。だから私は元気でいたいと思うとおっしゃっていて、そういうきっかけをつくってくれたのは、あんたら桜ライン311なんだとおっしゃっていただいたのです。それはもう、僕からするとすごい衝撃で、うちの事業は、未来の震災のときのその街の人の命を救うためにスタートさせました。でも、現代の人たちが、今関わってくれている人たちが、そういった人と人との交流の中でポジティブな効果がすごく出ているのだなと、今のお話は2013年当時なのですがすごく意識して、なので、できるだけ日本全国の皆さんに地域の人たちと関わってもらって、交流してもらって、それがボランティアさんにとって、地域の人たちにとっての明日を生きる力になるのであれば、これ以上のことはないなと思って大事にしています。

あともう一つはこの４番ですが、東日本大震災を契機に、多くの人たちの関わりによってつくられる１万7000本の桜並木で桜の街になっていったらいいなと思っています。岩手県の沿岸地域というと、どうしても東日本大震災という言葉が出てきますし、特に陸前高田に関しては津波の被害が大きかった街なので、そういったイメージというのは事実あります。でも、じゃあ50年後も100年後も同じように東日本大震災の街ですかといったら、そうではなくあってほしいというのが僕の個人的な願いなわけです。なので、50年、100年という時間軸をかけて、陸前高田イコール１万7000本の桜並木の街と認識していただきます。そうすると何が起きるかというと、日本全国からお花見に来る人たちがたくさん増えるわけです。そうなったときに、この街にお花見に来て、何でこの街はこんなに桜推しなのかと思う方が一定数出てくる。そうなったときに初めて、過去に東日本大震災という地震があって、津波があってというふうに伝わっていく。これもまた経験していない人たちからしたときに、受け取りやすい伝承の一つの形なのではないかと思っています。

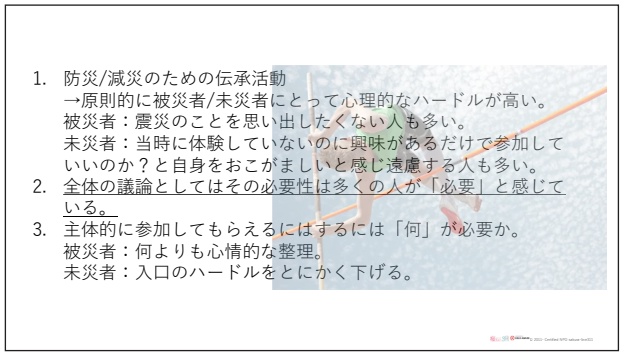
補足的なところでざっと御説明していきますが、植樹に必要な期間としては、少なくともあと20年ぐらいを見込んでいます。何でそんなにかかるのかという話ですが、まず１つは、復興関係の工事が全て完了しないと、植栽は一番最後の作業なので、検討できない場所がたくさんあるということ。もう一つは、地域の皆さんが積極的に残していこうと思えるのには、すごく時間がかかるということです。どういうことかというと、想像していただくと分かりやすいのですが、皆さん、津波の浸水域上に自分の御自宅があったとしてください。津波で御自宅は全損しました。あなたを除く御家族はみんな津波で亡くなってしまって、あなた一人になってしまいました。そうなったときに、震災のことって思い出したい出来事ですか。多分、全員がノーです。でも、そのことを絶対世の中でなかったことにしてはいけないというのも、多分、みんな共通だと思います。震災で何が起きたかというと、御家族であったり、被害によってそれぞれ個人としてすごくダメージを受けて、思い出したくない、できれば離れたいという思いを持っている方がすごくたくさんできました。でも、それと同様に、全体としては残さなければいけない、あれをなかったことにしてはいけない、次の被害者を出してはいけないというのも、これまた共通の認識として生まれたと思います。なので、震

災のことを積極的に残していこうという流れになるのは、風化がもう少し圧倒的に進んでいって、そこに焦りが出ていくタイミングだったり、被害を受けられた方がある種気持ちの整理がついて、これを次の子たちにちゃんと受け継いでいかなければいけないみたいな、もう少し先のことだと僕らはぶっちゃけ思っています。なので、僕らが無理やり土地の許可を得てぽんぽん勝手に植えていくというよりは、地域の皆さんとそこの、そのときの雰囲気というものと速度を合わせて、二人三脚で植えていこうと思っています。植樹事業における参加者としては、少なくとも５万1000人以上の方に御参加いただける裾野の広いものになっておりますし、その予算ですが、全体に、実は日本全国の企業さんや個人の方からの御寄附でうちの団体は賄わせていただいております。20年間ということで試算しておいて、最近の物価高騰とかで９億円では無理だなと思っているので近いうちに数字を上げようかと思っているのですが、少なくともそのときの試算としては、苗木１本植えるのに大体１万8000円ぐらいでしたので、それに１万7000本を掛けて約３億円、人件費が4.8億円、その他事業費が１億円程度で９億円ほどあれば、ある程度固まった本数をちゃんと残せるのではないかということで、日本全国の皆さんに御協力・御共感いただいて進めている事業になっております。





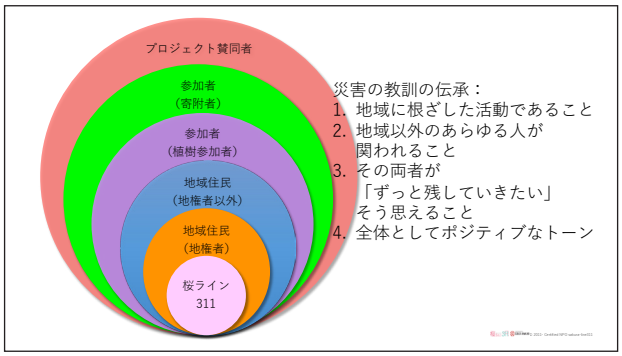
うちのＶＭＶということになりますが、自然災害で人命が失われる悲しみを二度と繰り返さない未来をどうつくるかというところにビジョンを設定しておりまして、僕らは被災経験があるので、ない人の他人事感を自分事に変えるというふうに、ミッション、使命を設定しています。その使命を達成するために、今いろいろお話しさせていただきました桜の植樹事業と、今日は一切お話ししませんが、私は防災士としても日本全国で防災シーンに関わるような講演をさせていただくのですけれども、そういった普及啓発事業、そして、その桜を街の財産として利活用していく提言事業ということで、３つの事業展開をさせていただいている団体です。

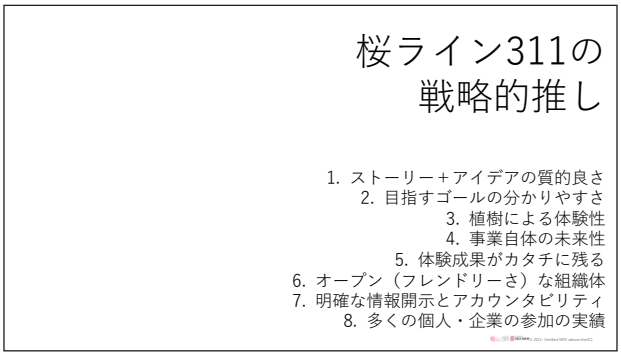


あと５分ぐらいなので、ここで今日のテーマに沿ったお話を少しさせていただければと思っています。今お話しした中にかなりエッセンスは含まれていたのですが、実際やらせていただく当事者として、まず１つ、防災・減災のための伝承活動ということは、参加していただく方の心理的なハードルがめちゃくちゃ高いのです。被災された経験のある方は、先ほど想像していただきましたが、震災のことを積極的に思い出したいですかというと、そうじゃないですという人たちが実は結構います。あともう一つ、まだ経験していない人たち、僕らが伝えたい相手なのですが、当時、自分が被害に遭っているわけではないのにそれに興味があるぐらいの感じで参加して、それってすごく申し訳ないなみたいに思う方は、実はすごくたくさんいらっしゃいます。被災者、未災者、それぞれの思いがあるわけですが、震

災の教訓を伝承するということは、全体の議論としては全員絶対にやっていかなければ駄目ということです。つまり、個人に置いたときのモチベーションと、全体に持っていったときのモチベーションが、実は大きくずれるのが伝承の特徴だと思っています。そういった状況がある中で、それぞれの皆さんに主体的に参加してもらうときに何ができたらいいのだろうかと考えると、被災された方に関しては、自分の思いはどうであれ次の時代のために残さなければいけないよねという心情的な整理が必要ですし、逆に被災経験はないけれども震災の伝承に携わりたいという方に関しては、入り口のハードルをどれだけちゃんと下げてあげられるのかというのがすごく大事なポイントだろうと思っています。

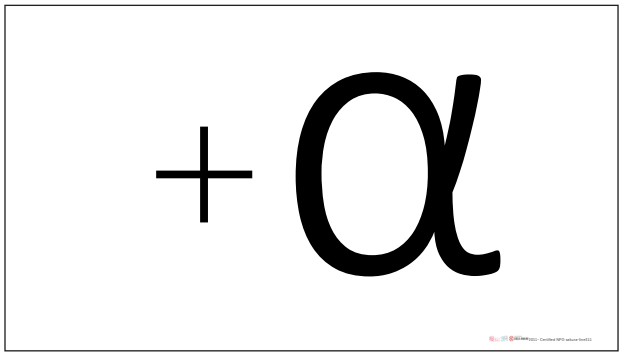
実際、当団体でどんな形で入り口のハードルを下げているのかということで、いろいろな参加の手法を年間通して用意しております。今日お話ししました植樹会の参加ももちろんありますけれども、植えた桜の木の管理のボランティアであったり、桜の枝を剪定するときに剪定枝といって廃棄する枝が大量に出るのですが、それを利活用して草木染めをやってみたり、企業さんと一緒にチャリティーを一生懸命やるので、そのチャリティーを買ってもらったり、御寄附いただいたり、講演会を設定してもらったりという形で、一つのところに入り口をつくるのではなく、いろいろぐるぐる回れるようなローテーションの仕組みにしておくとすごくいいなと思っています。





災害の教訓の伝承ということを考えたときに、達成するために幾つか条件があると思っています。まず１つは、地域の人たちが賛同できる活動であること、事業であること。これは、やはり継いでいく地域の人たちからいったら大前提です。では、地域の人たちだけが継げるものでいいですかというと、そうではないよねと僕は思っていて、日本全国の人が関わりやすいものというのもすごく大事なポイントだと思っています。この、地域の人と日本全国の人が共に、一緒に関われるようなフィールドをつくっていけると広がりが生まれていきますし、そこから多くの人たちが共感を得るようなものになっていくと考えています。この１番、２番、３番というのが全体としてポジティブなトーンでつくられていくのが、実は大事なことなのではないかと思っています。防災・減災とか、震災の教訓を後世に伝承していくということを考えるとき、これは人の死に携わることなのです。なので、テーマとしては必ず重いものになります。でも、重いだけのものは、参加したい人がすごく少なくなってしまうのです。だから、そこにちゃんといい意味での軽やかさみたいなものをどう用意できるかというのが、大事なポイントになっているなと私自身は考えています。もう二度と自然災害で亡くなる人を生みたくないというのが当団体としての願いなのですが、それを多くの人たちにお伝えするときに、私どもはここでいうと１番から８番までのことをフォーカスしてこっちに寄せて広報してあげる。そして、関わっていったときに、うちのもともと持っているメッセージに触れてもらうというふうな、２段階の広報やメディア戦略なんかを設定しています。

こちらは最後のスライドになりますが、記憶の伝承ということを考えたときに、伝承したい、その中心の思いは大事なことですけれども、それにプラスアルファの部分、外の人たちが意味を乗せられたり



というふうになっていくと、参加してくださる人、そこに共感を持って通い続けてくれる人がすごく増えていくのではないかと思っています。当団体としては１万7000本という目標を設定して、今、2200、2300本にまだぎりぎり届かない感じなので、計画の20％しかまだ植えられていないわけです。でも、これをいかに100％に近づけていくかということは、世の中のタイミングとか住民の皆さんのタイミングということもありますし、日本全国の皆さんが関わり続けてもらえるような組織をつくっていけるのかというところの挑戦でもありますので、これからもしっかりと続けていきたいと思っております。

　ということで、御清聴いただきましてありがとうございます。以上でございます。